歴史地震
第34号(2019) 231頁

［講演要旨］

文禄五年(1596)の豊後地震と伊予地震が同一地震(閏七月九日)である可能性

石橋　克彦(神戸大学名誉教授)

§1. はじめに

文禄五年(十月二十七日に慶長と改元)閏七月九日(1596.9.1)または十二日(1596.9.4)の豊後地震について，田山(1904)『大日本地震史料』は慶長元年閏七月九日とし，大森(1919)『本邦大地震概表』もこれを敷衍した．今村(1925)監修「本邦大地震年代表」(理科年表，第1冊)もこれを踏襲したが，第6冊(1930)からは十二日に変更され，今村(1929，地震i，1)は十二日を強調した．その後，武者(1941)『増訂大日本地震史料』では十二日となり，今村(1946，帝国学士院記事，4)は大森の九日説を強く批判した(今村・大森論争の余燼の感がある)．宇佐美(1975，1987)の『日本被害地震総覧』でも十二日とされた．

これに対して石橋(1989a，地震学会講演予稿集，No.1)は「1596年9月1日(4日という定説はたぶん誤り)の別府湾の地震・・・」と書き，石橋(1989b，第6回歴史地震研究会)は九日19時頃と主張した．宇佐美(1996)からは『日本被害地震総覧』も九日に変わったが，十二日説も根強いので，再検討する．

§2. 閏七月九日伊予地震という説

堤・他(2000，活断層研究，19号)は，西条市北条と広江および松山市の薬師寺の震害，同寺大般若経奥書から，9月4日豊後地震・5日伏見地震とは別の伊予地震が9月1日に発生したことは間違いないとして，それが中央構造線活断層帯(MTL)川上断層(愛媛県)の最新イベントの可能性があると述べた．松岡(2014，歴史地震研究会講演要旨集)も，閏七月十二日の豊後地震とは異なる九日の伊予地震を考えるべきで，京都・鹿児島の揺れはこの地震によるが，被害は伊予国に限られ，規模は大きくなかっただろうとした．いっぽう中西・弘瀬(2015，日本地震学会講演予稿集)は，閏七月九日20時頃の伊予地震は京都～鹿児島の広範囲が有感で*M*7程度，十二日16時頃の豊後地震は有感域が狭く*M*6程度とした．さらに松崎・他(2017，歴史地震研究会講演要旨集)は，閏七月九日20時頃の伊予地震(豊後にも強震動被害)，十二日夕方～夜の豊後地震(別府湾に大津波)，十三日0時頃の伏見地震の3つが発生したと考えた．

§3. 同時代史料にもとづく再検討

同時代史料の記事として以下のようなものがある(年月は省略)．〇九日甲辰，天晴，戌刻地動／十三日，戊申，天晴，大地震子刻・・・」(言経卿記)，〇九日天晴，酉戌刻間有地震／十二日，今夜亥刻許大地震有之，主上大庭構御座御也・・・」(孝亮宿禰日次記)，〇九日ヨリ十二日マテ大地震ユル・・・(仏通禅寺住持記，三原市)，〇九日ニ大ニ地振候て国中迷惑仕候(薬師寺大般若経奥書，松山市)，〇九日，戌刻，大地震，當社拜殿回廊諸末社，悉顛倒畢，又此日，府中洪濤起テ府中並近邊ノ邑里，悉成海底，黄昏時分也，同慈寺本堂斗相殘ル，大波至三(由原宮年代略記，大分市)，〇九日大地震仕豊後奥浜悉ク海成人畜ニ二千余死ス・・・(興導寺大般若経奥書，国東市)，〇九日薩摩ハ大地震也，京都ハ十二日之夜也(薩藩旧記後編)．

当時の時刻精度の粗さと，大分の9月1日の日没時刻(18時40分頃)を考慮すれば，これらの記述から合理的に推定される地震活動は，＜九日の19時頃に伊予～豊後に被害をもたらす大地震が発生して津波を生じ，薩摩でも強く揺れて京都も有感，十二日深夜に「伏見地震」が発生した＞　である．

九日に大地震と津波があったとする『柴山勘兵衛記』は多少時代が下るが，基本的には信頼できよう．西条市北条の八幡宮の被害を伝える『小松邑志』は，幕末の成立で「文禄四年」としてはいるが，「閏七月九日戌刻ノ地震ニ」と記している．幾つかの可能性はあるが，一番単純な推定は，大分方面～伊予に震源域をもつ単一の「伊予・豊後地震」の発生である．

『豊府聞書』ほかの後世の編纂物・地誌や『日本王国記』などの西欧人の文献は，伏見地震と混同している恐れがあり，重視しないほうがよい．「去七月十二日之地震之時，かみの関と申浦里は，大波にひかれて・・・」と記す『玄与日記』も同様かもしれない．

§4. 地震像と，十三日近畿大地震との関連

近畿大地震(伏見地震)は有馬-高槻構造線で発生したとされているが(例えば，宇佐美・他，2013)，石橋(1989a)は先山断層か根来断層の活動を経てMTLの鳴門断層が活動した可能性を指摘し，岡田・堤(1997，地学雑誌，106)が父尾断層の活動を確認した．この地震の震源域の西限は不明だが，香川県の被害(松岡，2014)もこの地震によるのではないか．

伊予・豊後地震の震源域は，西条市広江付近から別府湾までだと約150kmもあって*M*8級となるが，震源破壊伝播の効果も考えればもっと短くてよいかもしれない(*M*7.5級)．ただし西条市では地盤沈下が生じた可能性があり(中西，2002，地震ii，55)，北落右横ずれの川上断層が活動したのかもしれない．更なる調査が必要だが，九日と十三日の大地震はMTLの活動を含んで関連していて，その後の南海トラフの地震発生に影響を与えた可能性(石橋，1989a)がある．